＜03－01＞

様式２

<table>
<tr><td>課題名</td><td>新たな特産品目の生産振興とスマート農業技術の活用による安定生産</td><td>ものづくり</td><td>京都乙訓農業改良普及センター</td></tr>
<tr><td colspan="2">(1)普及指導事項（評価対象）
京おくら出荷部会の生産技術の向上</td><td colspan="2">(2)普及指導対象
京おくら出荷部会　１７名</td></tr>
<tr><td colspan="4">(3)活動内容と成果
・高単価な６月の出荷量増加を目的として、４月中下旬にトンネル被覆を行う栽培方法を提案し、展示ほ場を２カ所設置し、５戸の農家が被覆を実施した。その結果、昨年と比較して６月の出荷量は8.8倍、販売額は5.4倍に増加した。
・効率的な収穫作業ができる栽培方法として、分枝による低木化仕立て方法（１株2～3本仕立て）を提案し、7月下旬から試行ほ場を４か所設置し、仕立て方法の資料を配布した。その結果、慣行栽培（１株１本仕立て）に比べ草丈が約26㎝抑制されたため、収穫後期での効率的な収穫作業として関心が高まった。
・7月９日に出荷技術研修会及び現地検討会を開催したところ、16名の生産者が参加し、栽培管理のポイントや出荷調製方法等についての関心が高く、栽培意欲がうかがえた。また、JAと連携し、研修会やほ場巡回７回（5～10月）及び「京おくら通信№1、2」、「病害虫写真資料」を作成、配布し、適切な管理アドバイスを行った。加えて、新規生産者に対する栽培管理のサポートとして、モデルほ場の見学を行った。
・栽培後の株残さ処分の煩雑さが課題であったため、細茎化をねらいとした密植栽培を１カ所のほ場で試行したところ、茎径が慣行栽培に比べ約７㎜細く、機械（フレールモア）による裁断が容易となり、簡易な株の残さ処分方法として関心が高まった。
・新規生産者の加入を促進するため、代表的な生産者２戸の経営試算表を作成し、新規生産候補者に提示し、部会への加入促進を図ったところ、２名が新規加入の意向を示した。
・来年度産に向けて部会員アンケート及びＪＡとの打合せ会議を行い、部会員からの要望や課題の整理、対策方法の共有により、来年度以降の安定生産に向けた取組を確認した。</td></tr>
<tr><td colspan="2">(4)コメント</td><td colspan="2">(5)普及指導計画への反映状況、今後の活動等</td></tr>
<tr><td colspan="2">・京おくらの生産振興に目を付け、部会員を増やし、生産面積を拡大、出荷量を増やすことで市場評価を高めていく取り組みは評価できる。更なる生産拡大で、ブランド京野菜としての京おくらを産地化できるよう期待したい。

・令和２年と３年の１戸当たりの生産量は219㎏から293㎏にアップしており評価できるが、生産性が上がったのか、面積が増</td><td colspan="2">・次年度もＪＡ等と連携を図り、生産振興を進めていきます。

・令和２年、３年とも１戸当たりの栽培面積は約３アールと同じであり、生産量アップの要因は、生産性が向上したことによるも</td></tr>
</table>

えたのか不明であるなど、状況の報告が分かりづらい。次年度の報告で慣行栽培との比較等を含めて報告願いたい。また、成果指標としては、６月のみならず、全体や月単位での出荷量、販売額で評価することが妥当とも感じる。	のです。6 月は高単価が期待できるため、成果指標としましたが、次年度は、販売額アップのため、月単位や全体での出荷量、販売額の検証等を行っていきたいと思います。
・1 本仕立てか低木化仕立てか、どちらの収量が多いか、農家の作業効率はどちらが良いのか、今後検証され、より良い栽培方法で、農家の収入が増えるよう支援願う。	・次年度、低木仕立ての展示ほ場を設置し、慣行栽培との収穫量、作業効率等の比較検討を行い、検証結果を部会で報告します。
・6 月高値という市況は、他産地の出荷との相対的な関係で、今後変動する可能性もあり、フレキシブルな技術対応、啓発が大切。	・全体の出荷期間を通じて安定した出荷量となるよう、技術対応等の支援を行っていきます。
・JA との連携は取れているが、自治体も含めて連携を強める必要がある。商品としての差別化を図れるよう関係機関との連携を更に深めてほしい。	・さらに近郷産地のメリットを生かした販売方法等をＪＡをはじめ関係機関と連携して進めていきます。
・今後の展開として、未加入者へのアプローチが必須だと思えるが、熟練者メンバーの栽培をマニュアル化するなどの取組が必要。一方、未加入者もこうした情報等にどのようにアクセスしているのかなど、今度の展開としても検討が必要。	・ＪＡ京都中央の機関紙等での加入募集広報やモデル経営試算表の作成、提示により未加入者へのアプローチを行います。オクラは、ナス等のように経験を要する整枝や誘引作業を行わないため、熟練者の技術をマニュアル化することは必要ないと考えます。それに代わり、今後栽培ごよみに早期出荷方法や低木仕立て等の技術を盛り込んでいきます。